

## 平城宮・京出土の須恵器臼

**はじめに** 昨年筆者は、古代の須恵器搗鉢（奈文研の器種分類では「須恵器鉢F」という）が『延喜式』中の「陶臼」にあたり、その主たる用途がニンニクやショウガなど葷辛類の加工であったと考えた<sup>1)</sup>。そしてこの論考では、各地の須恵器窯を中心としつつ、およそ400例もの須恵器臼を収集し、須恵器の一大消費地である平城宮・京において、この器種がもっとも大型化することをあきらかにした。本稿では、平城宮・京出土の須恵器臼をいくつか紹介し、前稿の補遺としたい。なお本稿では前稿の主旨にもとづき、従来の器種名である「須恵器搗鉢」・「須恵器捏鉢」を排し、須恵器鉢Fを「須恵器臼」と呼びかえることにしたい。

**平城宮・京の須恵器臼** 平城宮・京で出土した須恵器臼は報告例がかぎられており、管見では奈文研所蔵の未報告例をくわえても20例を超える程度である。しかしこれらは、おそらく氷山の一角であろう。したがって、ここではわずかな標本から、平城宮・京における須恵器臼の全体像を推定することになる。以下、須恵器臼の代表例として掲出するのは次の資料である（図20）。

奈良時代初頭から前半の須恵器臼には、平城宮SD8600（1・2）およびSD3035、平城京左京三条二坊SD4750・SE4770の例（3・6）がある。このうち、1・3は底部を欠くものの、復元口径が20.0cmを超えており、SE4770の須恵器臼（6）もその口径は19.0cmである。これらは藤原京で出土する須恵器臼に比し、あきらかに大きい。また、二条大路の濠状遺構SD5100・5300からは5個体分の須恵器臼が出土しており（4・5・7）、口縁部をとどめた個体の口径は20.0cmを超えている。径高指数（器高が口径に対して占める割合）は90～100を示し、大型の須恵器臼に通有の器形である。5は底部内面に摩耗痕が残り、使用痕跡と思われる。2・7の底部外面には、この器種に特有の蜂巢状の穿孔がある。

奈良時代後半の須恵器臼としては、平城宮SK219の出土例がある。この個体も底部を欠くが、その復元口径は20.0cmより大きい。また近年、平城宮東院地区では、厨の配膳施設と解釈されたSB20130周辺（平城第595次調査、『紀要 2019』）において須恵器臼2個体が出土した。これ

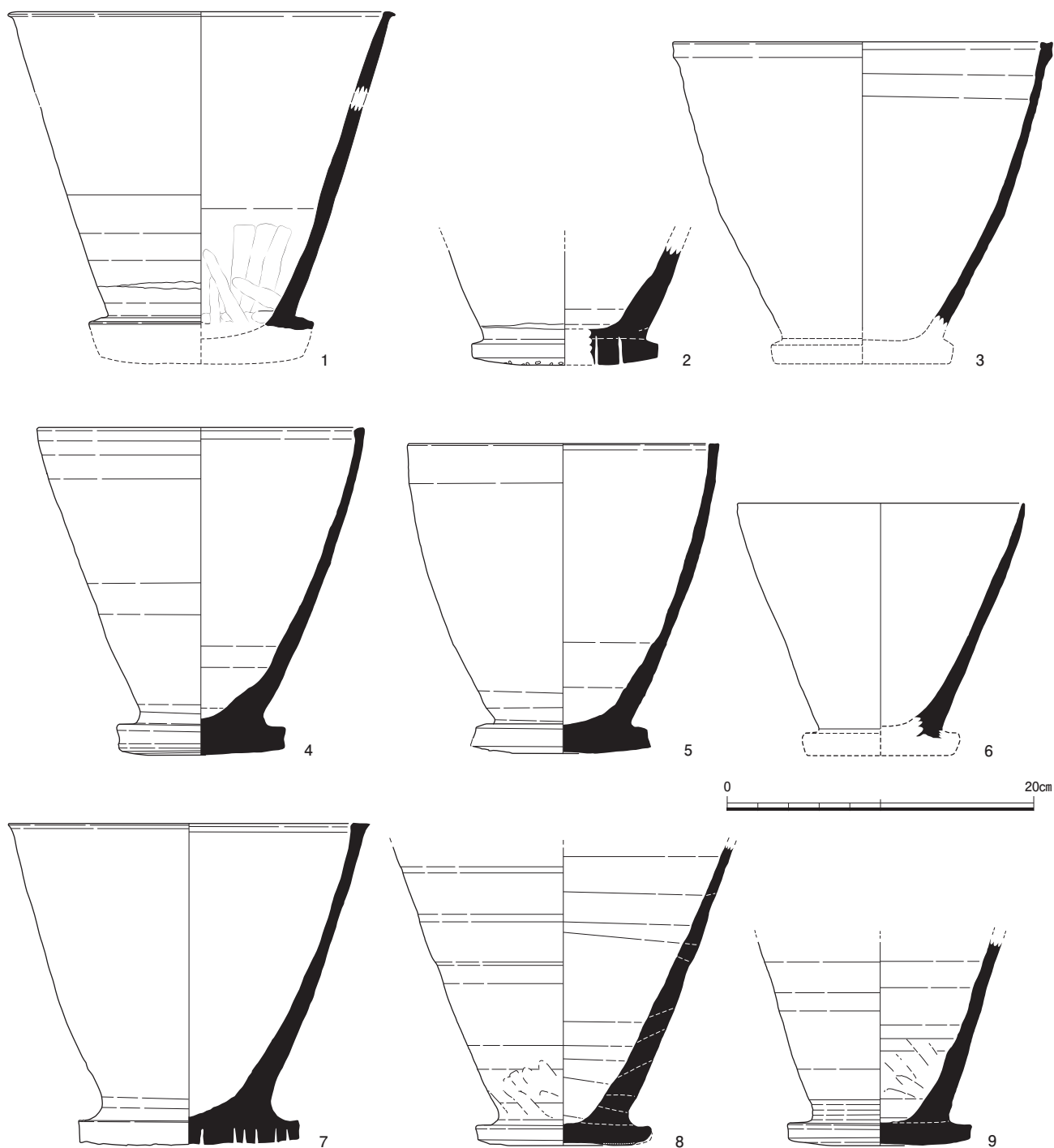
ら（8・9）は口縁部を欠くものの、1～7に匹敵する大型の須恵器臼である。9の底部内面には使用によって生じたとみられる摩耗痕が残る。

平城宮・京出土の須恵器臼で、その器形や大きさがあきらかな個体は上掲のとおりである。いずれも口径が18cmを上回り、それに応じて器高も20cm程度と大きい。飛鳥時代前半まではこれらに匹敵する大きさの須恵器臼がほとんど存在しないことを考えると、陶臼が最大化したのは飛鳥時代後半から奈良時代にかけての時期であったといえるであろう。この傾向は平城宮・京の須恵器臼にかぎらず、例えば宮城県大蓮寺5号窯（8世紀前半）<sup>2)</sup>、滋賀県宮町遺跡SV13258下層出土の例（8世紀中頃）<sup>3)</sup>にも口径20cmを超える大型品がある。

しかしながら、発掘調査が進んでいる京内の寺院では、今のところ須恵器臼の出土例がほとんど報告されていないことにも注意しておきたい。この傾向は、新資料の出土によって今後書き換えられる可能性はあるが、主に葷辛類の加工用具としての性格を帯びる須恵器臼が、寺院をはじめとする仏教関連施設で用いられる機会がかぎられていたことを暗示しているのかもしれない。

**須恵器臼と「陶碓」** 須恵器臼は『延喜式』の各式（踐祚大嘗祭式、四時祭式下、主計式上、内膳式、主水式など）において「陶臼」という器名で登場するが、長屋王家木簡（SD4750出土・霊亀3年〔717〕頃）には「陶碓」という須恵器の器名がすでに見えている<sup>4)</sup>。碓は本来「唐臼（からうす）」と読み、主に精米・製粉をおこなう踏み臼を指すものの、ここでの陶碓は陶臼の単なる表記違いであると考えられるので、両者はおそらく同一物であろう。SD4750の須恵器臼（3）は、同じ遺構から出土した「陶碓」木簡の完全なる同時代資料といえるのである。

奈良時代初頭の人々にとって、いわゆる須恵器鉢Fは搗鉢や捏鉢の類ではなく、臼の一種であったと考えられる。そしてその大きさや材質からみて、須恵器臼が脱穀や精白に用いられた臼ではなく、調理用の台所臼であったのも明白である。紙数の都合から言及はできないが、古代日本の須恵器臼は、現代アジアで広く用いられている台所臼と本質的には同じ調理器具なのであり、食材を擂りおろすのではなく搗きこなすという調理技術が、古代日本にいちどは定着していたことを思わせる重要な器物である。しかしながら、この汎アジア的な調理器具が



1・2：平城宮 SD8600      3：左京二条三坊 SD4750  
 4・5：平城京二条大路 SD5100      6：左京二条三坊 SE4770  
 7：平城京二条大路 SD5300      8・9：平城宮 SB20130 周辺

図20 平城宮・京出土の須恵器白 1：4

奈良時代に最大化する要因は、いまだあきらかではない。今後その意味合いをよく考える必要がある。

本稿はJSPS科研費JP18K01082「飛鳥時代・奈良時代の土器様式からみた日本古代の食具様式および食事法の復元的研究」の成果の一部である。 (森川 実)

#### 註

- 1) 森川実「古代の陶白」『古代文化』71-3, 2019。
- 2) 仙台市教育委員会『大蓮寺窯跡－第2・3次発掘調査報告書－』1993。
- 3) 甲賀市教育委員会『紫香楽宮跡関連遺跡発掘調査概報 甲賀市・宮町遺跡』2008。
- 4) 奈文研『平城京木簡概報25』1992。